

(2)「脱原発、反原発」という空気

学識経験者 D

昭和12年4月、後の九州大学教授 具島兼三郎氏は同志社大学助教授から満鉄調査部に転じ、同13年から15年にかけて部内報『満鉄調査月報』に「物資戦略と外交政策」と題する一連の論文を発表した。それは、当時近代戦遂行のために欠くべからざるものとされていた戦略物資百数十品目について、列強七ヶ国（米、英、仏、ソ、独、伊、日）それぞれの消費量とその構成（輸入、純国内生産、植民地での生産）を調べ尽し、それらを表にしてそれぞれの国力を可視化して比較したものであった。以て具島氏は、当時破竹の勢いで電撃戦を進めていたナチスドイツのジリ貧・敗北を予想し、「バスに乗り遅れるな」とばかりに、独伊との締盟を以て泥沼の日支事変の“快刀乱麻の局面打開策”と看做す輿論に警鐘を發したのである。曰く、

「独伊と“貧乏人連合”を組んで米英仏ソの“金持ちクラブ”を敵に回すなど、愚の骨頂。亡国の道」

日独伊三国軍事同盟の締結が、それまで強硬策を躊躇っていた米国内輿論を一気に硬化させ、「対日戦已むなし」の所謂 **point of no return** になったことは、大方の史家の認めるところである。

筆者の亡父は、戦時中、帝国大学工学部の助教授兼海軍研究嘱託として戦闘機のエンジン研究に携わっていた。その父が昭和37年頃語ったことを、当時中学生だった筆者は忘れられない。

「あの時、粗鋼ベースの鉄鋼生産量は日本の年間500万トンに対して、アメリカは5000万トンだった。日本がやっと5000万トンに達した今、アメリカは1億トンだ。」

要するに開戦時の戦力・国力の日米比は1対10だったのである。つまり、こちらから一発撃つと十発撃ち返してくるわけで、真珠湾後の事態はその通りに推移した。

では、なぜ“にも拘わらず”踏み切ったか。

それこそが、夙に山本七平氏が指摘した「空気」である。要するに、「反対できる空気ではなかった」のである。

当時の空気はほぼ次のようなものであった。

「圧倒的に不利と考えられていた日露の戦いも、世界に冠たる我が皇軍兵士の無敵の敢闘精神で勝ち抜いたではないか。物量の差ごとき、何の慮することやある。」

敢えて空気に抗した具島氏は、「高揚せる国民精神を沮喪する不逞の輩」として軍部の忌むところとなり、昭和17年の満鉄調査部事件でいの一に検挙されて同19年まで拘禁せられた。敗戦の昭和20年8月15日、具島氏は、「だから言わんこっちゃない」と呟いた筈である。

その日露戦争では、開戦に先立って明治政府要路が認識していた日露の戦力比は、4対6であった。それを、それこそ皇軍兵士の敢闘精神で5.5対4.5に押し戻して、薄氷の勝利を得たのであった。開戦前、政府の対露弱腰路線を難詰すべく押しかけた東京帝国大学の七人の博士を、時の首相桂太郎（長州閥）は、次のように言って追い返したという。

「黙らっしゃい。私も軍人だ。私は、大砲と弾丸の数を数えちよるんです」

“数量的検証を欠いた空気の支配”は、その日露戦争を終結させるべく開かれたポーツマス講和会議の合意に対する国民の怒りで、最初の暴発を見る。所謂日比谷焼打事件である。合意には、

僅かに南樺太の確保があつて賠償金の支払いは一切無かつた。国民は、「お国のための一念で父や子や夫を戦場に送り、相次ぐ増税に耐えてやっと勝ち取った勝利の末が“たったこれだけ”か」と激昂し、講和反対を叫ぶ群衆は都下日比谷公園に結集して暴徒化したのである。

カネもタマも尽きていた日本にこれ以上の継戦能力の無いことを、政府要路は（無論、全権小村寿太郎も）知悉していたが、当のロシアが、「俺たちはまだ負けていない。これからシベリア鉄道を使って態勢を立て直し、反攻する」と言っているさなかに、国民に向かって、「日本はこれ以上戦えません。国民諸君、この条件でご理解を」とは口が裂けても言えなかつた。政府は、戒厳令を布いて怒り狂う群衆を力で抑え込んで日露戦争は終わった。

歴史作家司馬遼太郎氏は、この日比谷焼打事件の明治38年9月5日を近代日本の **turning point** と見た。この日を境に日本は、今も続く「大衆社会」になったのである。それまでは“志士の時代”、言わばリーダーの時代であつた。

実際、司馬氏は、“このあとの日本人”を主人公にした歴史小説をついに書かなかつた。書く気がしなかつたのである。彼が書いた唯一の“このあと”は『この国のかたち』（朝日新聞社刊）であるが、そこで司馬は“日比谷後”を、「こんなものは本来の日本ではない、と叫びたい衝動が自分にはある」と書いて嫌悪した。

時移って昭和35年は「アンポハantai」の声が国中に充満した年である。時の首相岸信介（現安倍晋三首相の祖父）は、国会周辺を埋め尽くしたデモ隊の前に、「断じて西側陣営に留まる。一步も引かぬ。」として日米安全保障条約の改定を押し切つた。岸が敷いた路線が今日の日本の繁栄を齎したことを、今は老境に入っている嘗ての「ゼンガクレン」の闘士たちも密かに認識している筈である。

以上、三例を見た。つまり「空気に乗ってしまった」とき日本は破綻し、「断固空気に抗した」とき日本は安泰であつた。過去の「対空気戦」は言わば2勝1敗である。

今、日本は四度目の対空気戦の只中にある。敵は、「反原発、脱原発」という空気である。

以前から根強くあつたこの空気を決定的に“定着”させたのは、言うまでも無く福島事故である。その限りで根拠は十分にある。しかし「原子力をやめてこの国がやってゆけるか」という冷静な数量的検証を欠いているという点で、あの時と同じようにこれは空気である。実際、「エネルギーはどうするのだ」と問われた小泉純一郎元首相は、堂々と「今は答えない。何とかなる」と嘯いた。あの時の「・・・無敵皇軍の敢闘精神があれば、何とかなる」と寸分違わない。天才的煽動政治家小泉純一郎の面目躍如である。

今やこの空気は新聞紙上に、テレビ画面に、アフター ^{ファイブ} 5 の居酒屋談義に、法廷に、それこそ家庭の寝室にもトイレの中にも充満している。今のところ政府は辛うじて「原子力は重要なベースロード電源」としてその維持を謳っているが、そう言う政府要路の顔から徐々に自信が失われつつある。地方自治から国政に至るあらゆるレベルの選挙に於て、野党陣営は「反原発・脱原発」を掲げて票を獲ろうとし、与党側はひたすら「それは争点にしない」と、言わば逃げまくる。それまで与党内にあって脱原発を公言していた河野太郎は、閣僚に選任されるやそれを“封印”した。信念があるなら言い続ければよからう。閣僚の期間中だけそれを封印するなど、河野が大衆迎合の徒輩であることを示して余りある。

「福島住民を帰郷させる被ばく線量の基準を年間1ミリシーベルトにしたのは、根拠がない」

と、つい本当のことを言ってしまった丸川珠代環境大臣は、その空気に抵触して袋叩きにあった。叩いた方のマスコミ、政治家の誰一人として、国際宇宙ステーションに数か月滞在して数百ミリシーベルトを浴びて帰還した若田光一飛行士の健康を心配してやらないし、「一回で数十ミリシーベルトを被曝する X 線 CT スキャンや胃の透視は、制限を加えるべき」とも言わない。それらは、“空気外の事象”だからである。

過去の三度も此の度も、空気は“マスコミと国民の共振現象”で醸成される。「日比谷」では朝野新聞と万朝報が、「あの戦争」では朝日と毎日が、「アンポ」でも同じ朝日と毎日がその空気を煽りに煽った。

今も昔も、マスコミは常に「国民感情の増幅装置」として存在する。歓喜、嫉妬、期待、怒り、不安、同情……。要するに、何であれその時多くの国民が持っているらしい感情を増幅し、以て部数を稼ぎ視聴率をとろうとする。今も昔も、そのモードに入ったマスコミに、「本当にこれを進めていって、その先どうなるか」という冷徹な分析の姿勢は皆無である。

「あの無謀な戦争は、軍部という悪漢が嫌がる国民を無理矢理引きずり込んで起こった」は、戦後の定説であるが事実ではない。一部に狂信の輩がいたことは間違いないが、軍部は、マスコミと国民の共振で醸成されたその空気に乗ったのである。

あのとき「何とかなる」の拠り所が漠然とした「世界に冠たる……」であったように、今「エネルギー？何とかなる」の拠り所は、漠然とした自然エネルギーへの期待である。少し踏み込んで、それぞれの電源の特性と我が国のエネルギー需給構造と周辺安全保障環境を点検してみれば、それが幻想であることはすぐわかる。しかし、原子力反対を声高に叫ぶ野党陣営の誰一人、マスコミ人士の誰一人、その簡単な作業を実際にやろうとはしない。もはや反原子力の空気は、「いやなものはいや。ダメなものはダメ。来ないで、近寄らないで」という、殆ど駄々っ子の喚き声の観を呈している。

肝心の原子力規制委員会が、その空気の只中にある。5人の委員に「国の行く末を思い、エネルギー需給構造のあるべき姿を熟考し、決断する」姿勢があるとは思えない。発足以来3年も経って審査を終えた原子炉は僅かに5基である。明らかに「牛歩」は意図的である。しかし、言い訳はちゃんと用意してある。「これは、国民がお望みになったことです。」

いったい、どうすればよいのだろう。

あの時の空気は、国中を焦土と化し軍民併せて300万の犠牲を出して終わった。空気を煽りに煽った新聞は、その数日後には「一億総懺悔」という絶妙のキャッチコピーを捻り出し、一夜にして「平和と民主主義の守り手、皆様の〇〇新聞」に早変わりした。

筆者は、半ばは絶望している。あの時と同じように、行くところまでいかないと止まらないのかもしれない。原子力をやめ、その分を自然エネルギーで代替しようとし、できなかったので「温暖化は目を瞑る、それがどうした」と居直って全部火力で代替し、中東あたりで戦火がおこりシーレーンがキナ臭くなって石油天然ガスの供給が途絶え、経済が落ち込んで国民生活がはつきり悪化し、「こんなにひどいのはあいつらの所為だ」と排外主義が頭をもたげ、真夏の気温が普通に40℃を超えるようになって……。やっと、

「あの時、変なおじさんたちが『原子力をやめてはいけない』と言っていたのはこのことだったのか」

と気付くのかもしれない。

あの時の空気の端緒「満州某重大事件」から敗戦まで17年である。悪いことに、今次の空気の果てに上のような「答え」が得られるのはずっと先、つまり答えは多分「歴史的に」しか得られない。現に停電は生じておらず、今は「何とかなっている」のである。

ずっと先で、我々は「答え」を得て呆然とする者どもを冥界から見下ろして、「だから言わんこっちゃない」と呟いて溜飲を下げることしかできないのだろうか。

空気に乗るか、押し戻すか。正念場である。